



低出生体重児で出生した学齢期の子どもをもつ母親の心理的適応

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 孝子, 土居, 洋子, 上原, ます子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010787

原 著

低出生体重児で出生した学齢期の子どもをもつ母親の心理的適応

小林 孝子・土居 洋子・上原ます子

Psychological Adaptations in Mothers of Schoolchildren Who Had Suffered Low Birth Weight

Takako KOBAYASHI, Yoko DOI and Masuko UEHARA

Abstract The purpose of this study was to identify the psychological adaptations of mothers whose children were born with low birth weight. The subjects were six mothers whose children at the time of the interview ranged from elementary school to junior high school age. Data were collected by semi-structured interviews. As a result of analysis, the data were classified as follows: (1) the mothers' psychological adaptations were classified into three categories, "existing as a parent," "growing as a person," and "assigning a meaning to the birth;" (2) "existing as a parent" included three sub-categories: loving the child, coordinating the child's school life, and taking responsibility as a parent; (3) "growing as a person" had two sub-categories: understanding the pain of others and view of life; (4) "assigning a meaning to the birth" had three sub-categories: the child was born for my sake, the blessing of having children, and important proof that they had lived; (5) four categories were extracted as factors that strengthen the mothers' psychological adaptations: relationship with the child, the growth of the child, the family's support, and the presence of a person with whom they can talk. The results indicate that the following are important to enable mothers' long-term psychological adaptations: ① to understand mothers as both person and parent, ② to support mothers in assigning affirmative meanings to the birth, ③ to approach the factors that strengthen adaptation.

Key words: Psychological Adaptation, Mother, Low birth weight infant, School-age

I. はじめに

周産期医療の進歩により低出生体重児の生命予後は著明に改善され、より小さな低出生体重児の救命がなされる一方で発達上のリスクはいっそう大きくなり、長期的な予後の改善が課題とされている¹⁾。長期的予後に関する調査では、学童期の子どもが発達や学校生活への適応など子どもの発育・発達に焦点をあてたものが数多くみられ、子どもだけでなく母親への養育支援の重要性が示されている²⁾。また、低出生体重児の養育については、育児意欲の出現する時期

や、我が子の発達に自信を持つ時期が遅い³⁾、発育発達や食生活についての不安を持続させ、子どもの自発的な行動に対して制限的である⁴⁾という結果から、心理的なサポートの必要性が示されている。しかしながら、低出生体重児の母親の心理面に着目した研究は、出生後1年までの研究が殆どであり、母親の感情や適応を明らかにしているが^{5), 6)}、長期的な視点で母親がどのような心理や適応に至るのかを明らかにした研究はみられない。

長期的な適応の結果は、短期的なストレスに遭遇したときの結果に反映され、ストレスとは

適応的な対処の原動力を引きだしてくれるものである。低出生体重児の養育は、早産や長期の入院、育児や発達の問題など様々なストレスに遭遇し、母親は多くのストレスフルな状況におかれながらも、それらに対処してきた経過があるといえる。

そこで、本研究では、適応を対処過程の結果としてとらえ、学齢期に達した低出生体重児の母親がどのような心理的適応を示しているのかを明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象者

極低出生体重児（出生体重 1500 g 未満）で、B 医療機関の新生児集中治療室（NICU）を退院した小学生または中学生になる子どもを持つ母親で、現在子どもに大きな問題はなく、安定した状況にあると思われる母親を対象とした。

対象者選定の手順は、次のように行った。まず、2001 年 4 月に B 医療機関の承諾を得て郵送による質問紙調査を行い 68 名の回答を得た。質問紙調査の際に、面接調査の依頼を同時に発送し、同意の返送が得られた 12 名に電話での連絡を行った。連絡がとれた 10 名に対して研究協力の依頼を再度行い、同意を得られた母親 7 名に家庭に訪問しての面接を行った。電話で同意を得られなかった 3 名は、仕事等での多忙な状況が理由であった。面接を実施した 7 名のうち 1

名は、現在子どもが施設に入所中であることから対象とはせず、合計 6 名を分析の対象とした。

対象者の概要を表 1 に示す。面接時の子どもの年齢は 10～13 才、小学 4 年生～中学 2 年生であり、全員が通常学級に通っていた。また、出生時の体重は 658 g～1050 g であり、退院後に在宅酸素療法や未熟児網膜症の手術や多動傾向であると指摘された子どももいたが、いずれも現在は大きな問題はなく、医療機関や専門機関での継続的なフォローは受けていない状況であった。

2. データ収集方法

2002 年 4 月 23 日から 9 月 19 日の間に、対象者の自宅に訪問し、半構成的な面接を行った。面接内容は承諾を得て IC レコーダーに録音した。質問内容の一部は、①どのようなお気持ちで子育てをされてきましたか、②子どもを育ててきて良かったと思うことはどのようなことですか、③今までに大変だったことはどのようなことですか、④どのように大変なことを乗り越えてこられましたか、などである。面接時間は、1 時間 05 分～2 時間 10 分で、平均 90 分であった。

3. 分析方法

録音した内容を逐語記録にし、その言葉を分析の対象とした。

分析は、子どもを育ててきて良かったと思うことや大変だったことについて、その経過や内

表 1 対象者の概要

事例	母親の年齢	母親の職業	子どもの年齢・学年・性別	他の同居家族	出生体重	出生後の問題	子どものことで心配な事・その他
A	37才	パート	12才 中1・男	夫、次男（小3）	658g	退院後：在宅酸素療法	心配事はない、運動クラブに所属、大会でメダルを取る
B	49才	自営業	11才 小6・男	夫、長女（社会人）、次女（大学）	1010g	2才：多動傾向	算数・読み書きが苦手
C	40才	パート	10才 小5・男	夫、次男（小2）	570g	退院後：在宅酸素療法	心配事はない
D	45才	パート	11才 小6・男	夫、長男（中2）	936g	未熟児網膜症手術	友達が少ない
E	44才	パート	13才 中2・男	夫、長女（高1）	1050g	なし	心配事はない
F	43才	パート	10才 小4・男	夫、長女（大学生）	1006g	なし	心配事はない

表2 母親の心理的適応のカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
親として存在する	愛おしむ
	子どもの環境を整える
	親としての責任を果たす
人として成長する	人の痛みがわかる
	自分の人生を見つめる
小さく生まれたことの意味づけをする	私のために生まれてきてくれた
	子どもをもてることのがたさ
	大切な生きてきた証

容、母親の気持ちなど、単独で理解が可能な最小単位の文章を取り出し、文章中に含まれる意味内容を表す名称をつけた。さらに、共通の意味をもつものをまとめてカテゴリーとし、カテゴリー内の構成を再度文脈に照らし合わせながらまとめ、サブカテゴリーとした。

III. 結果

分析の結果、低出生体重児の学齢期における母親の心理的適応は、【親として存在する】【人として成長する】【小さく生まれたことの意味づけをする】の3つのカテゴリーに分類された。また、これらの適応を強化する要因として4つのカテゴリーが抽出された。以下に、カテゴリーの内容を説明し、母親の語った内容は小文字で示す。

1. 【親として存在する】

【親として存在する】は早期産によって低出生体重児を出産し、長期の入院や発達のリスクを抱えながら子育てを経験する中で生まれ培われてきたものであった。〔愛おしむ〕〔子どもの環境を整える〕〔親としての責任を果たす〕の3つのサブカテゴリーで構成された。

1) 〔愛おしむ〕

子どもへの強い愛情を母親は持っており、「愛おしい」「かわいい」「誰よりも子どものことを思っている」と母親は語っていた。このような〔愛おしむ〕気持ちは、出産後NICUで面会した時点で子どもへの強い愛情を感じていたり、子どもが成長する経過の中で愛情を感じるようになった母親もいたが、学齢期に達した

現在では全ての母親が子どもへの〔愛おしむ〕気持ちを抱き続けていた。

2) 〔子どもの環境を整える〕

子どもが成長していくための場の環境を整えるために、特に学校での環境を整えるために母親は家族とともに努力していた。小学校入学の際、就学猶予を受けるために幼稚園や教育委員会、医療機関を駆け回り、前例がなかったために苦労したが、子どものためには良かったと言った母親がいた。また、学校生活を送る中で、小さく生まれたことを理解してもらうために、他の生徒に向けて手紙を書いたり、子どもが作文を書く前に母親の気持ちを話して聞かせるなどしていたことも語られた。これは、小学校での総合の時間や保健体育の時間の中で取り組まれていたもので、学校側から提供された機会を利用して、母親はわが子のことを理解してもらい、子どもがより良い環境で学校生活を送れるように学校側にメッセージを送っていた。

こういう生まれ方して、かわいそうとかというんじゃないんだけど、同じ土俵で鍛えられるんだっただけなら鍛えられる、もまれるんならもまれるで、そうできた方がいい。幼稚園でも教育委員会としてもそういう例は初めてなんで、どうしようも出来ないって言われて、そうですかかって言うのも自分は悔しい。できるだけことはやってみたいっていうので、教育委員長と会ったり、生まれた時の主治医の先生に相談して、就学を通常の生まれた日のかたと同じにしたい、その努力をしまして、結局は一年間、学校に就学しないでおいたんです。1年間は体をつくってあげようということで、スイミングスクールに行かせて。すごく元気に明るく行動的になったんですよ。体力づくりに専念したのが良かったのかなあって。自信がついたんだと思います。(事例F)

担任の先生が、総合の時間で取り上げたいんですけど言ってくれて。孤立している中にねうちの子が入ってて、ちょっと人とテンポがずれてるといふか、そういうところがあるからって。人を知ることから始めようという先生の考えがあって、お母さんの気持ちを作文でいいですから書いてもらえませんかということだね。小さく生まれたことから、まあみんなと変わってるかもしれないけど、スタートの時点からどうしてもこう差があったので仕方がないんだって。最初の時点でみんなに追いつけてないんでという感じで書いたんですよ。人はみんなそれぞれ違うんで、みんなとはちょっとずれてるっていうの

があるかもしれないけど、みんな違っておもしろいんじゃないかっていう感じで書いたんですよ。先生も明るくなったと思いますっていうようなことを言ってくれて。友達とかもちょっと増えたみたいですね。すごく嬉しかったです。(事例 D)

3) [親としての責任を果たす]

予期せぬ早産、低出生体重児の出生、子育てという様々な経験を積み重ね、困難な出来事が生じた場合の対応を重ねる中で、母親は親としての責任を強固にし、現在の学校生活だけでなく子どもの将来に向けて、親としての責任を果たしていこうという思いを強く持っていた。

「早くこの世の中に出してしまった責任」「子どもを育てないといけないから死ねないという気持ち」といった母親の言葉があった。

親としては最終的には自分で食べていけるように社会的自立がちゃんと出来るようにするのが最終かな、子育ての終わりですよ、そう思ってるんで、今どうなるのか冗談言いながら色々模索している最中ですね。(事例 E)

2. 【人として成長する】

【人として成長する】は、妊娠中の入院生活やそれに続く低出生体重児の出産、NICUでの経験、疾病や障害の心配、未熟児の子育てなどの様々な困難や困難な状況におかれた人々と接する中で生じた母親の内面の変化である。〔人の痛みがわかる〕〔自分の人生を見つめる〕の2つのサブカテゴリーで構成された。

1) [人の痛みがわかる]

妊娠中の入院と安静臥床の経験、子どもの生命の危機、未熟児網膜症、在宅酸素療法などの困難な状況、また、自分よりも重症な妊婦、NICUでの重症な子どもと親、障害児とその親の存在や、困難な状況にあっても頑張っている人達と出会う中で、「人の痛みがわかるようになった」「体験した人でないと大変さはわからない」「大変ねという言葉かけは簡単にできないんだと思う」と語っていた。

初めて自分の子供の時にね出産の時にそんなんになったもんですから、本当にそのああ私なんか全然つらくないんだとか、もっとつらい人が何人もいるんやとか、今までだったら口先だけやったと思うん

ですよ。ああたいへんやろなとか思っても実感としてね。やっぱり自分が育てたんでね、それがちょっと分かる。自分の子どもがね障害を持って生まれてきたお母さん、あんなたくましく生きてるけど、それまでの間になんべんも泣いてると思うんです。だから軽々しくそう言えないというかね。体験した人じゃないと絶対にわからないしね。(事例 D)

2) [自分の人生を見つめる]

様々な困難な状況を体験したり対処していく中で、また子どもを育てるという経験を積み重ねる中で、母親は自分自身の人生を見つめるということをしてきた。これは、母親自身の親との関係を振り返り、親の気持ちを理解しようとし、自分が育った家庭や家族を肯定的に捉えなおしたり、自分の生き方をみつめ、模索しつつ、「人生観が変わった」「自分自身が変わった」と語っていた。

考えが古いかもしれないですけど、ひょっとしたら今まで何もなく病気もせんと文句ばかり言って親にね迷惑かけて生きてきたから、ひょっとしたら神様がそういう試練をって思うことがありますね。今まで親のこととか思ってたつもりやけど、やっぱりいろいろ文句とか言ってるかなとか、だからかなあとか。苦労というか、思ったのと違うわって思う時もいっぱいありますけどね、こうなったからって反対に、やっぱり得たことのほうが多いですね。こういう経験があったから、少しはやっぱり考え方とか本当に変わったと思います、自分自身変わったと思います。(事例 D)

3. 【小さく生まれたことの意味づけをする】

低出生体重児の出産と育児を経験し、学齢期に至った母親達は、小さく生まれたことについて肯定的な意味を見出していた。これは、〔私のために生まれてきてくれた〕〔子どもをもてることのありがたさ〕〔大切な生きてきた証〕の3つのカテゴリーで構成された。

1) [私のために生まれてきてくれた]

母親は、小さく生まれたことについて母親自身の成長につながることで肯定的に位置づけていた。「神様が私のために与えてくれた試練」「子どもにいっぱい成長させてもらった」と語っていた。

私は負けず嫌いだったんで。ちっちゃい頃は立っ

た歩いただの、歯が生えただの、そんな事でね近所の人と競うような時があるでしょう。それがやっぱり小っちゃいから、未熟児だからそんなしょうもないことでへんな競争心起こさんでいいよっていう為に、私はこの子にこういうふうに育てさせてもらってるんやろうかなって思いました。絶対普通に生まれてたら、ねえ、誰だれちゃんもう歩けてるのにまだあんた歩いてへんとか喋れてへんとか、そんなことすごい気にする親になってたのかなってというのは思います。(事例 C)

2) [子どもをもてることのありがたさ]

母親は子どもをもてたことを喜び、家族の一員として子どもを迎え入れ、感謝の気持ちを持っていた。母親自身が育ってきた家庭では得られなかったことを新たな家族を築いていく中で実現させたり、身内を亡くしたり流産を経験した中で命のありがたさを実感していた。これらは、小さく生まれながら、子どもを無事に助けてもらったという感謝の気持ちとともに、小さく生まれたわが子を育み、ともに歩んでいけることをありがたいと感じていたものである。

NICU にね色々な子供さんとかもいらっしゃるでしょう、そしたらね、今日生まれた子供さん3日ぐらいしたらね、保育器が片付けられてたりする時もあるんですよ、心が痛いっというかなんともいえないうね。自分とこの子は無事に助かって、助けてもらってここに生きてるけども、でもやっぱり生まれてきた限りは一生懸命生きようやってな、貧乏でも一生懸命生きようやって。今でも、そういうふうにありますね。(事例 F)

3) [大切な生きてきた証]

母親は、小さく生まれながらも無事に育ったわが子と、懸命に生きてきた自分自身や家族との歴史を肯定的に捉え、[大切な生きてきた証]として位置づけていた。退院後の授乳状況や体重を記録していたノート、NICU での写真、初めて履いた靴、退院後に在宅酸素療法で使っていた酸素チューブなどを大事に保管していた。

すごい思い出があったんですね。赤ん坊の頃の写真、ネガを非常用持ち出し袋に入れてたんです。もう他の写真はともかく、これだけはなんか、うん、ここまで来た証やし。今まだ出してないし、入れたままで、出すのもなって思うんで。写真ももちろん一人目っていうのもあるんでしょうけど、すごい思

い入れをもってアルバムを作りました。(事例 C)

4. 心理的適応を強化する要因

以上のような母親の心理的適応を強化する要因として【子どもとの絆】【子どもの成長】【家族の支え】【話を聴いてくれる人の存在】の4つがあった。

1) 【子どもとの絆】

母親は、子どもへ深い愛情の気持ちを抱くだけでなく、子どもからも深い思いを感じ取っており、そこには母と子の絆が形成されていた。「私のことを思ってくれている」「照れくさがる年だけれどもお母さんのことを好きでいてくれる」「シーソーと同じでお互いが頑張っているから頑張れる」と話していた。

今でもね、手つないだらすぐあくびするんです。どうしてお母さんと手つないだらすぐ眠くなるんやろうって、この間言ったんですよ。それで思い出したんですけど、お母さんずっと箱の中にいる赤ちゃんの時、ずっとお母さん指こうやって握っててんで、寝る時もずっともう家に帰ってきてても指をこうやって握らせたんで、それやからかもしれへんで。(事例 F)

2) 【子どもの成長】

何事もなく無事に成長することで母親は安心していた。また、様々な病気を経験したり克服することで子どもの成長を確信し、病気に直面した当時は混乱したことで過去の出来事として現在の健康状態につながることで整理されていた。

「順調に体重が増えていったのでホッとした」「すぐに熱を出さなくなったのもう大丈夫と思った」という言葉が聞かれた。

子どもに、生まれた時こんなサイズやったのになんかふっとしたときに成長をうかがうときってあるんですよ。ああって、こんな事言うようになったんやとかね、こんな事考えるんやとか思う時に。ああとか思うでしょ。へえって。ちっちゃなボウル、料理するボウルあるでしょ、あれでお風呂入れたよなあっていつて。(事例 F)

3) 【家族の支え】

夫の存在とともに、NICU 入院中や乳児期に

は母親の実家のサポートが非常に助けとなり、母親の力となっていた。実家のサポートとしては、「冷凍母乳を運んでくれた」「家事を全面的に委ねて育児に専念させてもらった」「実家に帰って息抜きさせてもらった」というような実質的なサポートであった。夫については、家事にも育児にも協力的であったり、「大変な時期には夫とよく相談した」「一人だったらしんどいけど二人だから頑張れた」「なくてはならない存在」と母親の精神的な大きな支えとなっていた。

4) 【話を聴いてくれる人の存在】

母親は自分の話を聞いてもらうことによって不安を軽減したり、気持ちが救われる経験をしていた。一方で、「もっと話を聴いてもらいたかった」と話を聴いてもらえることの有用性を語る母親もいた。話を聴いてくれる人というのは、病院の看護師や地域の保健師、保育士など専門家の他に、夫であったり、姉であったり、友人であった。

今日は、私の話をきいてもらえるっていうので、今まで子どものこととか小さくまれたことは話してこなかったんで、聞いてもらえるんならって思って。順調には育ったんで、たいした心配は今はないんですけど。退院してすぐに、保健婦さんとかが何人か家にきて、見せてくださいって感じでいわれて、住んでる市では一番小さな赤ちゃんだって、それで見せてくださいって感じで。NICUでも他のお母さんたちから、ちょっと仲間はずれみたいにされたり、小さいときはあんまりいい思いをしなかったんで。それは、ずっと日記みたいなものにつけてました。それでストレス発散してたのかな。親が近くに住んでたんで、色々聞いてもらったりはしましたけど。(事例 A)

お話聞いてもらうっていうので、すごい嬉しいんです、だから今日来られてお話してもらってすごい嬉しいんです、こんないっぱい喋らせてもらってすごく嬉しいんですよ。いろんな看護婦さんとか保健婦さんとかいろんな人にほんとにいっぱい話聞いてもらったっていうのは私にとってはすごくみについて、自分で言っていてあっそうかって気づくこともありますし、あ、そういうことはこういうことですよって言うてもらったら、あ、そうなのかって思うことがあるでしょう。こういう立場の方に聞いてもらうっていうのは、私はそのかた達がいっぱいいらっしやっただから、それですごく助かったと思います。

だからすごくお話聞いて欲しいんですよお母さんは。しんどい事とか自分の頑張ってる事とかって、私がここまでやっていますっていうここは出来ないけどもっていうふうないう所がね、聞いてもらうのはすごい助かる事だと思います。(事例 C)

IV. 考察

1. 学齢期における母親の心理的適応

母親の心理的適応は【親として存在する】【人として成長する】【小さく生まれたことの意味づけをする】の3つのカテゴリーに分類された。

Redman は適応のレベルを4段階あげ、最も低位のレベルを節約（自己保存とエネルギー保存を目的としている）、第2のレベルは代償（防衛規制を用いたりして適応は内行的に行われる）、第3のレベルを動機性（適応反応は外部に向けられ自己のニードや目標に沿うように環境が操作される）、そして最も高いレベルは成長（自己実現を目指している）としている⁹⁾。今回得られた結果には、低位の適応である節約と代償のレベルは認められず、動機性のレベルとして【親として存在する】の〔子どもの環境を整える〕、成長のレベルでは【人として成長する】というカテゴリーと一致しており、母親は高いレベルでの適応に至っているものと考えられた。これは、対象となった子ども達は、身体的に大きな問題を抱えていない状況で通常学級に通っており、安定した状況にあることも影響していると考えられる。また、ストレスは本質的には不適応的な有害なものではなく、重大なストレスが適応的な対処の原動力を引きだしてくれるものであり、ストレスから強さを獲得できその後の危機的状態においても使える⁷⁾と考えられており、高濱¹⁰⁾が行った母親の適応過程に関する研究でも、問題解消プロセスには、消失していく問題と質的变化を経て存続する問題があり、子どもの誕生によってもたらされる様々な問題や出来事は、母親を母親として発達させる積極的な意義があることが報告されている。本研究の対象となった母親達は、小さく生まれた子どもの生命の危険や発育・発達のリスク、養育上の様々な困難な状況に対処してきた

プロセスの中で、強さを獲得し、子どもの成長や就学などの環境の変化に適応する力を蓄積していったといえよう。

また、新たな子どもの誕生や子どものなかで起こる発達的变化への親の適応過程を成人期の発達ととらえることもできる¹¹⁾。学齢期の親の成長に関しては、新谷ら¹²⁾が小学生から中学生の子どもの親を対象に調査しており、「親としての自覚」「人間としての成熟」「ストレス」の3因子を抽出している。今回得られた結果の【親として存在する】【人として成長する】が、前者の2項目と同様の内容となっていた。【小さく生まれたことの意味づけをする】という適応に関しては、低出生体重児の親である特徴を示している。母親を親としての存在とともに人としての存在としてとらえながら、小さく生まれたことについて肯定的な意味づけができることを目指した支援が必要とされると考えられる。

2. 低出生体重児と母親への支援

母親の心理的適応を強化する要因として【子どもとの絆】【子どもの成長】【家族の支え】【話を聴いてくれる人の存在】の4つのカテゴリーが抽出された。

藤本⁵⁾は、極小未熟児を出産した母親の心理過程をショック期、児の死に対する予期的悲嘆と自分の出産に対する悲嘆期、児との関係性の回復と合併症・後遺症に対する不安期、児の特性の受け入れときずな形成期の4段階を示しており、その中でも児とのきずな形成には相互作用の機会を多くもつことと、母親としての自信の回復が必要であったと述べている。藤本の研究の対象となったのは、出産後7週から26週を経過した母親であるが、本研究の結果で示した事例Fのように、出産後に形成された絆が継続することから、早期のきずなの形成は母親の長期的な適応を促進することに有用であるといえる。

また、子育ては長い道のりであり、岡本ら¹³⁾の行った低出生体重児の養育に関する調査では、成長が不安な時期は退院から1才までが多く、発達が不安な時期は生後6ヶ月から2才までと長期に続くことが明らかにされている。不

安の多い時期や、就学時などの節目での子どもの成長を確認できることが母親の自信を強めていくものと考えられる。

さらに、母親は【話を聴いてくれる人の存在】によって不安を軽減させ、効力感が高められていた。今泉¹⁴⁾は、未熟児をもつ親への支援については親の人格も深化し成長していく姿が見られるが、他方で自分の感情を抑制し疲労が蓄積していくこともあり、自分の感情を受け止めてもらい一緒に児のことを考えていく場を親は欲していると提言していることから、母親への情緒的なサポート役として看護の役割は大きい。また、母親の気持ちを語る場としての、地域でのグループや親子教室も有用な支援方法であると考えられる。

V. おわりに

学齢期に達した低出生体重児の母親の心理的適応を分析した結果、母親の心理的適応は【親として存在する】【人として成長する】【小さく生まれたことの意味づけをする】の3つのカテゴリーに分類された。また、母親の心理的適応を強化する要因として【子どもとの絆】【子どもの成長】【家族の支え】【話を聴いてくれる人の存在】の4つのカテゴリーが抽出された。長期的な母親の適応を促すためには、母親を親としての存在とともに人としての存在としてとらえながら、小さく生まれたことについて肯定的な意味づけができることを目指し、適応を強化する因子がさらに強められるようなアプローチを行っていくことが重要であると示唆された。

本研究は、現在安定した状況にあると思われる母親を対象として、母親の心理的適応について、母親の語った内容から現在の状況を分析したが、時間的な経過は明らかにできていない。長期的な適応の結果は短期的なストレスへの対処の結果が反映される⁷⁾ことから、これらの継続的で相互に影響し合うプロセスを解明していく必要がある。また、適応を促進する要因に関しては明らかにできたが、反対に適応を阻害する要因については解明できていない。これらのことが、低出生体重児の母親の支援を検討する上での今後の課題である。

謝辞

本研究にご協力いただきましたお母様方、医療機関の皆様にご心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 三科潤, 低出生体重児, 保健の科学, 44 (4), 252-255, 2002
- 2) 前川喜平編, 育児支援とフォローアップマニュアル, 金原出版, 1999
- 3) 原仁, 篁倫子, 三石知左子, 三科潤, 山口規容子, 超低出生体重児の母親からみた育児, 小児保健研究, 59 (1), 40-46, 2000
- 4) 星永, 小田切房子, 奥平洋子, 若葉洋子, 大伴潔他, 低出生体重児の多面的縦断研究 - 3歳までの発育・発達と養育環境 -, 小児保健研究, 57 (6), 745-754, 1998
- 5) 藤本栄子, 極小未熟児を出産した母親の心理過程, 聖隷学園浜松衛生短期大学紀要, 13, 100-111, 1990
- 6) 木戸久美子, 内山和美, NICUを退院した児を抱える母親の対児感情に関する実証的研究, 母性衛生, 39 (1), 114-119, 1998
- 7) Richard S. Lazarus, Susan Folkman, Stress, Appraisal, and coping, 本明寛, 春木豊, 織田正美監訳, ストレスの心理学 - 認知的評価と対処の研究, 実務教育出版, 1991
- 8) 小林孝子・土居洋子・上原ます子, 超低出生体重児で出生した子どもの学齢期における養育者のストレス (1), 平成13年度文部科学省学術フロンティア研究成果報告書, 55-64, 2001
- 9) Wilma J. Phipps, Barbara C. Long, and Nancy Fugate Woods, Medical-Surgical Nursing, 高橋シュン日本語版監修, 臨床看護学 I, 医学書院, 1993
- 10) 高濱裕子, 母親の適応過程についての研究, 母性衛生, 36 (1), 141-150, 1995
- 11) 氏家達夫, 高濱裕子, 3人の母親: その適応過程についての追跡的研究, 発達心理学研究, 5, 123-136, 1994
- 12) 新谷由里子, 村松幹子, 牧野暢男, 親の変化とその規定要因に関する一研究, 家庭教育研究所紀要, 15, 129-140, 1993
- 13) 岡本伸彦, 山口和子, 中西真弓, 松田幸子, 超低出生体重児のフォローアップにおける医学的社会的問題への包括的ケア, 小児保健研究, 56 (4), 521-524, 1997
- 14) 今泉岳雄, 未熟児をもつ両親へのケア, Perinatal Care, 13, 160-167, 1994